

野鳥だより

—北海道—

第19・20合併号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和49年11月
5月・8月・11月・2月 年4回発行



休息するアオアシシギ 鵜川河口にて 昭和49年9月23日 撮影 野村梧郎

奇形のハクチョウとの再会

玉田 誠

奇形のハクチョウを発見しその写真撮影に成功したのは47年4月22日の午後で、原生花園のあたりで北帰行のため海岸に向った1群38羽の中にいたもので、まったくの偶然でした。そして同年の秋、青森県浅所の畠山正光氏と東京都世田谷の高木章君から目撃報告を受けましたが、濤沸湖では2春秋その姿に接することはできず、他からの報告も得られませんでした。

今春小学校3年の新田芳子君が3月1日の17時20分ごろ自宅前で、濤沸湖に頭上をかすめて飛来した一群7羽の中に奇形のハクチョウが混じっているのを見ました。2日朝のハクチョウ数は成鳥68羽、幼鳥6羽ですべて北浜の開水面に憩っており投餌も行ってたところで、それからは大げさに言えば全力投球でその発見に努めましたが見出すことはできませんでした。畠山氏からの報告では首が下に折れ曲がるのは飛行中だけであるとのことでしたので、飛行するハクチョウには特段の注意を払い土曜日の午後や日曜日は終日湖畔にねばり、心ひそかに見物客が雪ボールを投げて飛ばしてくれることを願ったり、新田君の見間違いではなかったのかと、その報告をうたがったりさえしました。

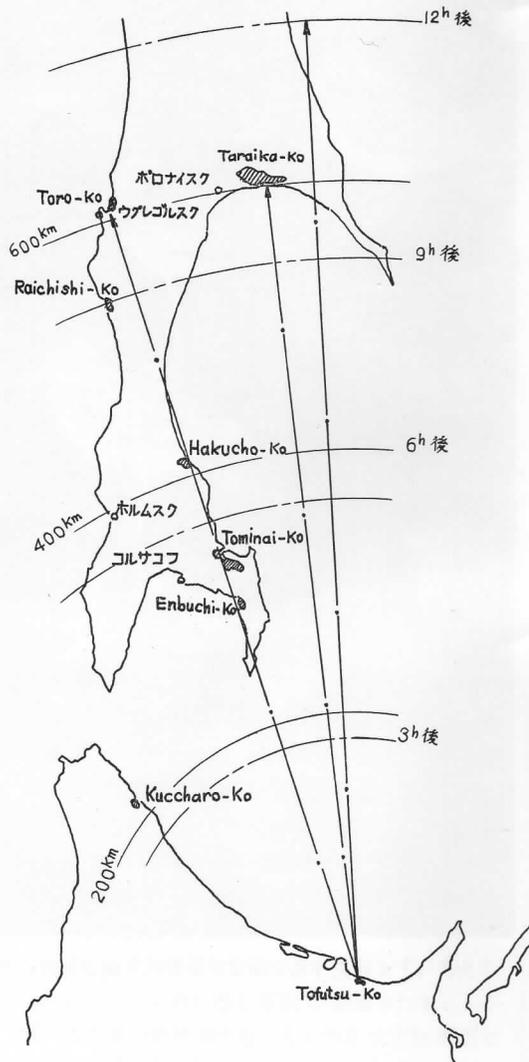
濤沸湖の結氷面に水路状に東西約7kmにわたる開水面が生じたのは4月16日ごろで、ハクチョウの数も約3000羽にも増えましたが、私たちの懸命な努力にもかかわらず奇形のハクチョウは確認できず、なんらの情報も入手することができませんでした。濤沸湖の氷もほとんど融けた4月20日の午後第4回目の在湖数精査を行い3400羽が憩っていることを確認しましたが、大部分のハクチョウは原生花園や浦士別入口付近の湾状部に集結しており北帰行の間近いことを物語っていました。

21日の日曜日は終日北帰行の群をチェックできれば奇形のハクチョウを見出したいと思いましたが用事ができたためせめて朝の観察だけでもと北浜に出かけました。投餌場付近に憩うハクチョウの数はすでにめっきり減り成鳥50羽幼鳥8羽を確認した後残り少なくなったエンバクをこれが最後だと言い聞かせながら散布しましたが2羽、3羽と飛来して69羽が餌についていました。

耳馴れた飛行中のハクチョウの鳴声に顔をあげてみるとやや南よりの空に9羽が飛行しており、その内の1羽

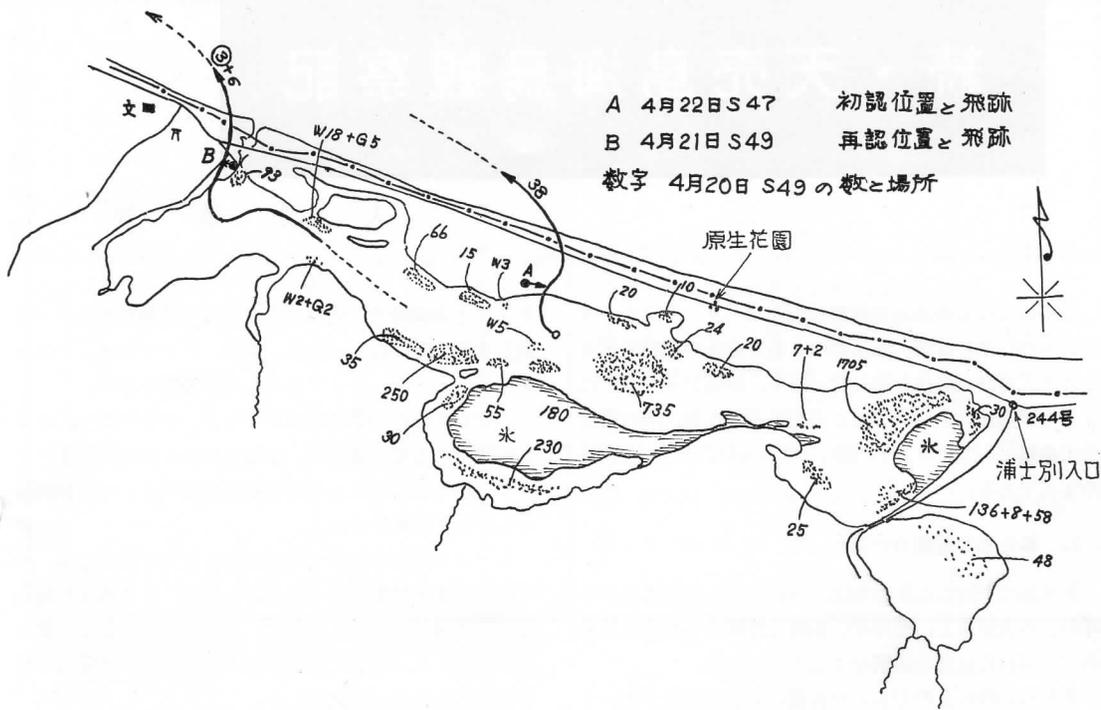
が棒状の立派な糞を3個も落したので私の目はその群に一層の注意をはらうことになり、先行する3羽の中にまぎれもないあの奇形のハクチョウを見出したのでした。

そのときの鮮烈な感動は筆舌につくすことはできません。何故か冷たいものが背筋を走り、声もたてえず、身



60km/h, 無風時の飛距離

奇形白鳥渡去飛跡・在湖状況



動きすらできず彼女の姿を追い求めるだけでした。この一群は海岸方向にむかひのち北西に転じて姿を消しましたが時間にして3分ほどの再会でした。生憎カメラを持参していなかったのでその姿をフィルムに止めることができず、彼女のためにもその姿を残してやりたかったとくやまれてなりません。しかし、心と脳裡に焼きついた彼女の雄々しくも健気な姿は何如なる天変地異に合おうとも失うことはありません。

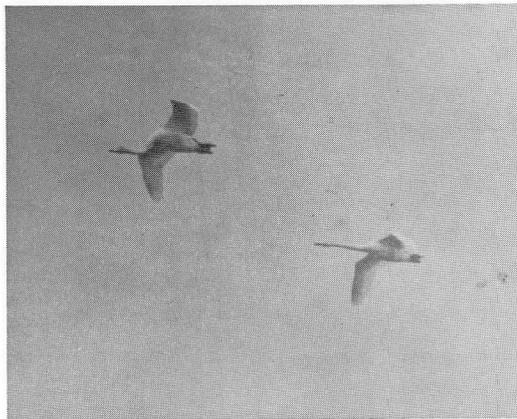
奇形動物の生存率は極めて低いと言われるなかに初認から2年、よくも無事に生きてきたものだとその生命力の偉大さに心打たれるものがありました。しかも坐して生命を保持したのではなく、すでに4度の渡りを行い、いま5度目の渡りを行っているのです。

初認は土曜日の午後で再会は日曜日の午前でした。そして22日と21日と暦上では1日の違いこそあれやはり4月、そして共に北帰行でした。初認のときは私が彼女たちの方へ出向いて見送る形でしたが、今回は彼女たちの方が、憩っている地点から海上に出て北上する群が多いのに、わざわざ北浜まで出向いて私に見送らせる形になりました。自然、とくに動物と人間との出会い、つまり時間と空間の一致が一度ならず二度も私自身の上におこったということは単に偶然だと片付けられないような気がしてならず、背筋に冷いものを感じた所以もこのあたりにあるのではないかと思います。

ハクチョウの北帰行は一般に気象状況の穏やかな日

多いのですが21日から22日にかけては相当な強風が予想されていました。事実9時ごろからは南よりの風が強くなり夜半は雨も混じえていささか不安を感じるほどの荒れ模様になりました。あのハクチョウたちはいまどこを飛んでいるであろうか、どこで翼を休めているのだろうか、目覚めるたびに思い浮かべてはその北帰行の無事を祈ったのでした。そして昭和49年4月21日午前8時は、永久に忘れられない日時になったのです。

*この日、15時の天気図によれば樺太東岸は南西風力4となつていますので、この頃までは風は有利に作用したはずであり、時速60kmで飛行すれば遠瀬湖や富内湖は飛び越えて、白鳥湖あたりまでいつている計算になります。



(網走市立北浜中学校)

続・天売島海鳥観察記

入江 義智

昨年行った天売島海鳥観察に引きつづき、今年も7月27日～29日の3日間、私は他の3名と海鳥の観察をするために、再び天売島を訪れた。以下、観察記録をもとに今回の観察旅行についてまとめてみる。なお、同行者は小山政弘、入江智一、野村聡（いずれも野鳥愛護会会員）の3名である。

1. 私たちの観察コース

天売島に上陸した私たちは、かねてからの計画どおり岬の上の方からと、海岸ぞいを回った岬の下の方からとの二方面から海鳥の観察することにした。

私たちの岬の上の方からの観察の中心地点は「ケント鴨燈台」付近の展望台となった。この展望台は眼下にウミガラスの集団繁殖岩礁として知られている「赤岩」があり、ケイマフリやウミネコの姿やそれらの飛翔のようすが肉眼でも十分観察できる条件の良い地点となっている。そして、私たちに眼下に広がるエメラルドグリーンを十分満喫させてくれた。

2. ウミネコの観察

キャンプ場での私たちは、主に上空を次々に飛んで行くウミネコの群を観察した。

前回及び今回とウミネコの観察をしてわかったことが、天売島のウミネコの行動には一定のルートがあるようだ。私たちが滞在した期間には、その大半は「赤岩」～「かぶと岩」付近一帯の集団繁殖地でテリトリー保持や餌採取のために1日をおくり、その一部は餌を求めて天売港や焼尻港付近の海へ午前4時ごろから移動しはじめて、採餌の後、午後7時ごろまで帰帰しているようであった。そして、キャンプ場から通称ケント鴨燈台までの海岸線が、そのコースの一部になっている。

頭上を行き来していたウミネコはほとんどが成鳥で、ときどきその群の中にウミウやオオセグロカモメの姿が見られた。

3. 海岸ぞいでの観察

岬でしばらく観察した後、海岸ぞいに回って「赤岩」まで行ってみることにした。「赤岩」付近に達したのが

ちょうど満潮時で、結局、その寸前で浅瀬が渡れず「赤岩」までは行けなかったが、途中、キアシシギ、イソヒヨドリ、ヒメウ、ケイマフリなどが観察できた。

「赤岩」付近の沿岸ではウミネコ、ケイマフリ、ウミウが餌をとる姿が見られ、小魚を口にくわえたケイマフリや、数十秒間潜水して餌を捕獲するウミウの姿が肉眼でも詳しく観察できた。

キャンプ場から海岸づたいに歩きだして約30分後、ウミネコの集団営巣地の下に到着した時、ウミネコが驚いて一斉に飛び立ったと思うと、私たちは雨のような糞の攻撃を受けた。攻撃に悲鳴をあげながら急いで写真を取り終えてその場から退散した。

難波船が横たわる所で予期していた動物を発見した。海岸近くの草むにマムシが休んでいたのである。昨年私は土地の人に捕えられて首をもがれた生々しいマムシの死骸を近くで4匹見ているが、生きているマムシを見るのははじめてのことだ。マムシはふつう50cmくらいであるが、天売産のものは大型で60cm以上のものがおおいとされている。マムシはふだん湿った所を好み、夜光性でキャンプ場での夜間活動は十分な注意が必要だ。隣の焼尻島にはマムシはいないといわれていて、羽幌町ではマムシ退治のために昭和47年、40羽のコウライキジを取りよせたが輸送中に1羽が死亡したため、計39羽を天売島に放鳥した。しかし、土地の人の話によるとその効果は乏しくいっこうにマムシは減らないそうである。その黒ずんだマムシは実に無気味で、背すじが寒くなってしまった。

4. 結び

今回の観察旅行では、すでにウミネコ、ケイマフリ、ウミガラスの繁殖の終わった後で、特にウミガラスはるか北の方へ渡ってしまったものが多かったようで、かなり数が少なかった。繁殖期が過ぎた天売島は、日毎に寂しさを増していくようだったが、あちらこちらを飛びまわるケイマフリの愛らしい姿は何といってもすばらしかった。

参考までに今回の観察旅行で確認した野鳥を表にし天売島の略図を付け加えておく。

ヒビキ ナダ
響灘埋立地の野鳥たち

武井修一

福岡地方、平地での紅葉も最後を迎えています。冬鳥たちもその数を次第に増しています。

さて今年には北九州市若松区の響灘（ひびきなど）埋立地に11月19日にコハクチョウ4羽、11月23日にクロツラヘラサギ1羽が飛来しました。コハクチョウは11月19日地元猟友会の方が発見されたものです。11月23日同地を訪れたところ、サギ類に混じっているクロツラヘラサギ1羽を認め、記録しました。県下では1922年有明海の記録があるのみで、今回で2度目と思われます。

自宅近くの江川ダムには減水による貯水面積の減少にもかかわらず、カルガモ、マガモ、ハシビロガモ、ヒドリガモ、オカヨシガモ、トモエガモ、コガモ、オナガガモ、ヨシガモ等が次々と渡来し現在千羽を越えています。

響灘埋立地は現在造成中で、工事用のダンプがひっきりなしに通るのですが、埋立地に工事の関係で一時的にできた水溜や干潟に、コハクチョウ、クロツラヘラサギがいる訳で、工事完成に伴い水溜等もなくなる訳で両種とも今回限りの飛来になりそうです。

両種の他、埋立地には、アオサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、ウミアイサ、カワアイサ、スズガモ、マ

ガモ、キンクロハジロ、カンムリカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミネコ、カモメ、キセキレイ、ヒバリ、ミサゴ、トビ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ハマシギ、ダイゼン、コチドリ、シロチドリ、ユリカモメ、スズメ等が見られました。



コハクチョウ

北九州市響灘埋立地

クロツラヘラサギ

北九州市響灘埋立地
(福岡県甘木市)

昭和49年春の鵜川河口での 観 察 記 録

羽 田 恭 子

春のシギチのシーズンに、鵜川河口に行きました。偶然、5日間連続して誰かが観察していたことになるのでその記録を集めてみました。しかし、始めからそのつもりで、カウントしていたわけでないで、例えば、ヒバ

リやハクセキレイは沢山いても、数を数えなかったり、せめて、シギやチドリだけでも数えるとかの約束があったわけでありませんで、不備ですが、同じ場所での5日間の記録は、何かの参考になるのではと思います。

春の渡りは蕃殖を控えて早いといわれていますが、なるほどこの表でみても入れ替わり立ち替わりしているようです。

稀な、コオバンギが観察されたり、トウネンやハマシギの何百もの群れ、大きなシャクシギの群は見ごたえがあります。

秋には、皆さん、でかけてみませんか。

(札幌市 主婦)

月 時 天 観 察 者 名	5. 24 9:20~14:30 曇時々晴 溝部、羽田	5. 25 9:20~14:30 晴 新 宮	5. 26 9:20~14:30 曇後小雨 野村、萩、 田原、溝部	5. 27 9:30~11:30 雨 柳 沢	5. 28 9:20~14:30 曇時々晴 溝部、羽田
1	1			○	1
2					1
3					1
4					1
5					6
6					2
7	2				○
8	○		○	○	2
9	1		4	○	5
10	8		3	○	4
11		3		3	
12		2		1	1
13	1	6	7		4
14	1		50	700±	68
15	190	500±	60	500±	55
16	9		1		
17			1	3	
18	2	3	2	○	1
19	2	○	1	4	2
20	2	2	2	30	2
21	25	12	2		
22	12	3		30	4
23	38		1		
24	1		○	○	○
25	○		○	○	120
26	100±	20	○	○	○
27	○	○	○	○	
28	○	○	○	○	
29	3		○	○	
30	3		○	○	
31		○	○	○	○
32	300±	300±	350±	○	2000±
33	○			○	
34	○		○	○	
35	○	○		○	
36	○	○		○	
37	○	○		○	
38	○	8		○	
39	○				
40	○				
41					○
42			○		
43	○			○	
44	○	○		○	
45			○	○	
46	○		○	○	
種 類 数	31	20	23	29	30

※ ○印は、いたけれど数を数えなかったもの ±は、約の意

ホシガラスと高山林業との関係について

井 上 元 則

I はじめに

筆者は20数年前、黒岳のハイマツ地帯でホシガラスを見たことがある。それが忘れられず一度ハイマツとホシガラスとの関係を知りたいと思っていたが、1974年7月5～6日に湧駒別、同8月29～31日に層雲峡から大雪山系を調査する機会を得たので、ホシガラスと高山林業との関係について、この概要を報告する。

II 黒岳と桂月岳のハイマツ林

黒岳は層雲峡登山口より5合目までロープウェーで登り、そこからならかなコースをリフトで7合目まで登る。5～7合目間はエゾマツ・アカエゾマツ・トドマツを主とした針広混交林でネマガリダケが密生している。7合目附近から次第にダケカンパの混生が多くなる。ダケカンパ帯は標高1,500～1,700mの間にあるが、冬の常風・積雪量・地形などによってその巾は一様でなく、ところどころにハイマツの小群落が侵入している。

ダケカンパ帯の上はハイマツ帯で、いわゆる高山帯といわれる部分で、大雪山の中央高地では、およそ1,700m以上の地域である。この地域にはハイマツ林とお花畑が交錯し、モザイク状に配列しているが、地学的・地形的・気象条件によって広大なハイマツ林もあれば、高山草原のところもある。また岩礫地で、わずかに地衣しか生えていないようなところもあって一様ではない。

黒岳の頂上は標高1,984m、桂月岳1,950mであるから大体において、1,700～1,900mの高地にかけて広大なハイマツ林が断続して、植生上ハイマツ～コケモモ群集ができていく。この群集の標徴はハイマツ・ガンコウラン・キバナジャクナゲ・コケモモのごとき高等植物とハナゴケ・ムシゴケその他のような地衣植物などがある。

III ホシガラス

1. ホシガラスの学名と分布

ホシガラス *Nucifraga caryocatactes japonicus*

HARTERT はカラス科・ホシガラス属の鳥で、北海道・南千島・本州・四国等の高山で、夏繁殖する。その他佐渡・九州・伊豆諸島などでも発見されている。

2. ホシガラスの習性

ホシガラスは、大雪山のハイマツ地帯で、多くの人によって確認されている。大雪山系の森林では早春から本種を見かけるので、繁殖は確実視されているが、巣を発見したという記録はない。専門家たちは大雪山系の標高1,400m附近で、エゾマツ・アカエゾマツ・トドマツ等の針広混交林の終りからダケカンパ地帯に移行するあたりで繁殖しているであろうと推定している。

8月下旬から9月中旬にかけてハイマツの実が熟すると黒岳・桂月岳・白雲岳・北鎮岳・北海岳・鳥帽子岳などのハイマツ地帯（標高1,700～1,900m）に飛来して、ハイマツの熟した実を啄食する。

8月30日（晴）黒岳から桂月岳附近のハイマツ林でホシガラス数羽の小群を、数回観察することができた。その飛行はゆるやかで、波状に飛び、カケスの飛ぶ姿によく似ている。しわがれたみ声でガー・ガーと鳴いている。体の大きさはハシボソガラスよりはるかに小さく、ほぼカケス大であるが、尾の末端に白い帯があるので簡単に区別できる。この鳥は平常は雑食性で果実・種子・昆虫などを食べる事が知られている。

今回は8月30～31日ホシガラスが日中ハイマツ地帯に出現するのを見た。黒岳の監視員柴田清美氏によると、前年の同期にくらべて、本年の飛来個体数は少ないが、おそらく9月10日ごろまでが、最盛期だろうとのことであった。

IV ハイマツ林とホシガラスとの関係

ホシガラスの採食方法は、ハイマツ林へ飛来すると、まずハイマツの実の熟したと思われる毬果を1個ずつもぎとり、それをくわえてハイマツ林縁の地面に飛び、それをくちばしでつついて破り、毬果内の種子をとり出して啄食する。そういう動作を2～3回繰り返すとハイマツの種子を口にはおぼりながら、さっさと下方のダケカンパ林へ飛んでいく。今回はどの群も2～5羽ぐらいで同一地点に10分と長くはとまっていなかった。このような現象は、ハイマツの実がまだ充分熟さないため、ホシガラスの飛来個体数が少なかったせいかも知れない。

また前年ハイマツの実を啄いばんだあとの毬果断片が1カ所に20～30粒かたまっていたのを鳥帽子岳への途中で見つけたが、これは前年1羽の鳥がただ1回で、ついでにばんだものではなく、同一鳥が数回同じ場所で毬果を

割ったものか、あるいは別々の鳥が同じ場所を選んで種子を啄食したものであろう。

清棲博士によれば本州北アルプスのハイマツ林では、ホンガラスはハイマツ毬果の啄食地を定めていることが多いと報告していることと一致している。

さて大雪山のハイマツ毬果の種子は、大きいもので60粒、小は40粒、平均50粒ぐらいであるから1羽のホンガラ1個所で2コ以上の毬果を破れば100粒以上の種子となる。したがってハイマツ毬果を2〜3個啄食し終ると、残った種子20〜30を口にはおぼって飛び、適当な空地に隠匿するものである、このような動作を日に何回も繰返すものらしい。

いずれにしてもホンガラスが毬果を破った場所の土壌条件がよければ、落ちこぼれた種子が発芽する可能性がある。実際に土壌条件がよく、稚樹の生えている場所もところどころで見つかった。したがってホンガラスの種子隠匿性にもとづく、ハイマツ稚樹の発生も見逃すことはできない。

さてホンガラスがハイマツの毬果をつついて、中の種子をほじくり出し、頬の袋状になったところや食道に20〜30粒詰めこんで、ダケカンバ林へ飛んだ場合、どんな場所にその種子を隠匿するか、今回は短時間で調査ができなかったが、往々にしてダケカンバ帯の疎開したところにハイマツが小群状に生えているのは、旭岳ロープウエーの天女ヶ原駅から姿見駅の間でよく見ることができ、これらはかつてホンガラスが運んできたハイマツ種子を地面に隠匿したところから発芽したものでなかろうか。

大飼哲夫博士によるとハイマツ種子をほおぼったホンガラスは、ハイマツのない草木やコケばかりの芝地に行きくちばしで小さい穴をつくって、その中にくわえて来た実を入れて、上に草などをかけてかくしておく。また一つの穴に20〜30コのハイマツの実がかくされているがおそらく夏の間でまだ植物の実や種子のできないときに食うものと思われる。しかしかくしたものは全部食べられずに残っていて、これが発芽するため、全くハイマツの実が風などで運ばれると思われぬ所に簇生していると報告していることから察すると、ホンガラスはハイマツの種子散布に一役買っているといえよう。

実際に北海道の山を歩いてみると標高1,000m以上の山頂附近にハイマツ林がしばしば見つかる。これからはかつてホンガラスがくわえて来て、隠匿した種子がもとになって、現在のハイマツ群落になったものもあろう。

すでにホンガラスと同科のカケス類はナラ・クリ・ブナなどの種子を隠匿する性質があり、種子の散布に貢献していることは、ドイツのデングラー博士や筆者らによって確認報告されている。これらの事実から考え合せ、ホンガラスのハイマツ種子隠匿性は、ハイマツの天然更

新に大きく貢献しているものであって、高山林業に一役買っている鳥といえよう。

V 結 び

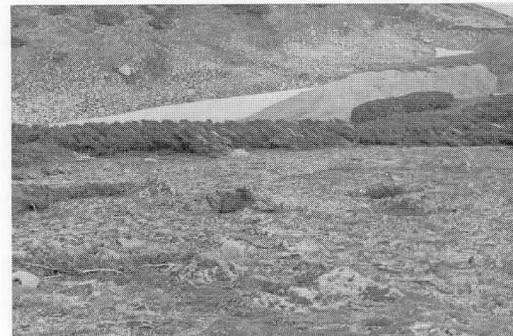
以上大雪山のホンガラスの生態と高山林業との関係について述べた。本稿が多少なりとも林業家、自然保護関係者、野鳥研究者のご参考ともなれば、著者望外の幸である。終りに臨み本調査に際し、種々ご高配を賜った旭川営林局近藤豊経営部長に深謝の意を表する。



ホンガラス (桂月岳頂上附近 1974. 8. 30)



前年度ホンガラスが啄食したカラマツ毬果
(鳥帽子岳への途中 1974. 8. 30)



ハイマツ林の更新状況、前面は若い小群落が見える
(鳥帽子岳への途中 1974. 8. 30)

(北海道栄養短大教授 農博)

チゴハヤブサの観察

入江 智 一

チゴハヤブサは、外観は極めてよくハヤブサに似ていますが、体は一回り小さく、飛翔はツバメに似ていて、翼を鎌の刃のように撓ませて飛ぶ、このチゴハヤブサが千歳の青葉公園に毎年渡来しています。記録をたどってみますと、1971年度は5月1日、9月1日、1972年度は5月26日、9月12日、1973年度は5月4日、8月26日という具合です。今年も5月26日に、その華麗な姿を見せてくれました。

去年の5月6日には、チゴハヤブサのディスプレイと交尾行動を確認しましたが、青葉公園内での営巣にまではいたっていません。その時の交尾行動の様子は、まず雌が見晴らしのよい枯木の樹上にとまって、翼を鎌の刃のように広げ、さらに12枚の尾羽がよく目立つように扇状に広げて、鋭く「キー、キー」と鳴き立てるとまもなく雄がその声に呼び寄せられるかのように姿を現わし、翼を小刻みにはばたいて雌の背に乗ってから数十秒程で交尾行動は終わります。

今年は運よく青葉公園内で、チゴハヤブサの営巣を観察することができたので、日を追って述べていきたいと思います。

6月23日、野鳥観察中にチゴハヤブサの巣を見つけました。その巣は1971年にナラの木に営巣したハンブトガラスの古巣を利用したので、樹上10～15メートルの所にあり、巣から20～30メートルの樹上には雄が警戒に余念がないようです。

7月12日、樹上の巣にチゴハヤブサの尾が出ているのを確認、まだ抱卵中と思われます。観察をしているうちにチゴハヤブサが私に気づいて巣の上にチョコンと立って、鋭い視線を浴びせかけ、数分間にらみ合いが続きました。

7月17日、樹上の巣の上でみると、孵化1週間ほどの白羽に包まれた雛が三羽いました。私が顔を覗かせると手前にいた一羽が突然翼を広げ、鋭い声で「キー、キー」と鳴きだしたときは、いささか、びっくりしたしだいです。孵化一週間ほどの雛といえども、親鳥が鳴いているかと錯覚するほどです。また、カラスなどは、



人が巣に接近すると、一撃必殺の急降下を仕掛けてくるのですが、チゴハヤブサの場合は、巣の回りを飛び回って侵入者に対して、感嚇する程度でした。観察の回数を重ねる内に親鳥の警戒心は、だんだん強くなって、進んで姿を現わすようになりました。

7月25日、雛の成長の速さには目を見張るばかり、体の大きさも、ほぼ親鳥と同じ位で、雛鳥の顔には頬線の黒羽が現われ始め、猛禽類の風格が処々に増しつつありました。

8月4日、雛鳥は既に巣立ってしまっていました。まだ巣の近くには巣立ったばかりの幼鳥がいるようで、親鳥の警戒の手は一時もゆるむことはないようでした。私は樹上に上り、巣の大きさを測定し、ペリットを採集しました。巣の大きさは図に示すとおりで、採集物はペリット1個、トンボの羽2枚、小鳥の翼の骨1個でした。産座の所には小鳥のものだと思われる細い骨が多数散在していました。おもしろいことに排泄物が北の方角に集中していましたが、おそらく親鳥が餌を雛鳥にあたえるのは南の方からなのでしょう。それに、朝日ラルス、週刊世界動物百科第117号にチゴハヤブサの巣のことが書かれてあり、「巣はハンブトガラスの古巣をよく利用するが、古巣を利用するとき、この鳥は新しい巣材を何も加えないばかりか、反対に内側に詰まっている古い巣材を引っ張りだして基礎部分だけにしてしまうことが多い。」とあって、千歳での営巣の場合は、何も手を加えていませんでした。

8月18日、幼鳥を連れている親鳥を確認。9月1日、3日、4日、14日には青葉公園から1キロメートルほどの私の家の近くまで姿を現わしてくれました。これからも毎年その姿を現わしてほしいものです。

北大植物園

山田清二

北海道の中心札幌。コンクリートの建物、車がひっきりなしに走る道にかこまれた中に、緑のオアシス北大植物園があり、道内外の観光客などひろく一般の憩いの場として利用されています。しかし、一般の人々は鳥類には関心を寄せていないようです。

植物園の鳥を観察するには、人の多い正午と土・日曜日を避けると、9時から4時半まで緑の芝生に横たわりながらゆったりと観察できるようです。

私は、何年前からか植物園の鳥を写真で記録したいと計画していたのですが、いつも計画だけに終わっていました。

今年の春、カッコウに連れられて実行に移すことができましたが、それは5月から6月の2カ月間で、雨の日も風の日も約3日おきに植物園に通いました。

まだ肌寒い5月、木の枝につぼみがふくらんでいるころ、ヒヨドリ、アカゲラ、クロツグミが最初に見られ、しだいに太陽の日が長くなり、木の枝に若葉が茂りはじめるころムクドリが飛来した。このころになると、視界は茂る若葉のため悪化し、写真を撮すにも双眼鏡でのぞくにも不自由をきたしました。しかし、鳥達にとっては餌となる虫が多くなって、良いエサ場となったのです。

植物園で一番多く巣を作るのはムクドリである。その巣は木の幹の穴、巣箱と多く、確認しただけでも15を数えることができた。つぎに多いのはクロツグミではないかと思われる。

めずらしいのが一つありました。園の中央に博物館があって、その横の林に一本のニレの大木があります。その一番上に、木の枝で作った巣がありました。トビの巣です。一羽のヒナが見られました。はじめのころ、カラスが飛来するたびに親トビがカラスをけちらすのを見かけたのですが、日がたつにつれてヒナの体が大きくなったためか、カラスも寄りつかなくなったようです。

6月のはじめにオオルリの声を聞きました。力強いびぎきに感動しました。その声を録音しましたが、さえず

りの周波数が高く、本当の生の声をとれませんでした。オオルリも一週間ほどでどこかに去りました。

しかし、美声の持主はまだいます。クロツグミ、アカハラ？ キビタキです。キビタキは小さな体でよくさえずります。彼の背の黄と白の斑が印象的です。園内には三つのテリトリーがあるようです。

5月の中旬にカッコウも何度か来て鳴き、札幌の中心でも自然があるのだと感じさせられました。また、アカモズを一度だけ見ましたが、それきりで、植物園の奥深く入っても見られませんでした。カッコウが来たのだから6月の末にヒナが見られるのではないかと期待していたが無理でした。そのかわりに、シマアオジの幼鳥が親鳥に連れられて餌を探している光景が見られました。また、水場が多いせいかシマアオジに混ってキセキレイの水あびも見られました。

もう7月、ムクドリのヒナは巣穴から姿を見せ、トビのヒナももうじき巣立つころです。その後は夏山のシーズンとなり、私の都合で植物園には行けなくなりましたが、来年もまた、鳥を見に植物園へ通ってみたいと思います。



鳥獣保護員報告から

- ◇ 島山周治
49年1月6日、旭川市。たまたまコウライキジを見る。
49年1月27日、ムクドリ120~130羽越冬。
- ◇ 森口和明
49年2月1日、上磯町七重浜でコクガン23羽。同日函館山、カラス変死242羽。
- ◇ 永井正夫
49年5月18日、共和町。ヒグマ、ミツバチの巣箱を荒らす。
- ◇ 坂本正二
49年6月9日、白糠町庶路。アネハヅル（と同定）畑に飛来して荒らす。
- ◇ 山上奎芳
49年6月11日、沼田署にアカエリカイツブリ届く。13日に回復したので放鳥。
- ◇ 奥田直行
49年6月17日、大樹町日方川。カワアイサ4羽、ヒナ約15羽。
- ◇ 野口繁雄
49年6月18日、羅臼町オンヨロコマ川上流。カワアイサのヒナ5羽以上。
- ◇ 山口日出也
49年6月19日、別海町カネキン沼。ハクチョウ4羽（幼鳥2羽）。
- ◇ 伊藤熊雄
49年6月23日、夕張市。釣糸にからまったオンドリを解き放してやる。
- ◇ 三好博久
49年6月25日、尻岸内町女那川林道。大フクロウ？
羽毛は白、ポツ赤毛入。
- ◇ 伊奈昭夫
49年6月26日、室蘭、登別海岸。ミズナギドリ死体漂着。約200羽、やせていて胃はカラ。
- ◇ 小沢広記
49年6月14日、札幌市藤野地区。ウグイス向いの山に営巢中と思ったが、機械の音（工事中の）がおさまっても声がないのは、他に移ったためと思う。モズ、カワラヒワ給餌台に飛来。シジュウカラ工事の騒音で営巢中止。ヤマセミこれもだめ。
- ◇ 中田克道
49年6月30日、札幌市あしりべつゴルフ場にて、キツネにゴルフボールを取られて困っていると管理員の話。3~4匹のキツネが常時付近にいる様子。
- ◇ 竹内清美
49年6月5日、稚内市声間大沼。オジロワシの営巢を確認した。
- ◇ 宮田市太郎
49年7月5日、鶴川町田浦。キツネにニワトリ120羽やられる。
- ◇ 隅田重義
49年7月21日、大沼コートピアに宿泊し、早朝野鳥調査。アオジ、ウグイス、キジバト、ムクドリ、ツバメ、シジュウカラ。数は多い。
- ◇ 三好博久
49年7月23日、恵山岬でヒドリガモ5羽、スズガモ2羽を見る。
- ◇ 森口和明
49年8月16日、戸井、武井の島、恵山岬。オオセグロカモメ繁殖地あり。
- ◇ 竹村正男
49年8月17日、北檜山町。マガン7羽見る。

《事務局だより》

- ☆ なんともしまらないことになって申訳ありません、野鳥だより19号20号合併号をおとどけます。貴重な原稿や写真をお送り下さった方にお礼とともに、発行がくれたおわびを申しあげます。
- ☆ 事務局のメンバーに異動がありました。本会創立以来の幹事として大活躍をした、百武充さんが、阿寒国立公園管理事務所にご栄転になり、現在は川湯にお住いです。運転免許にもアタック大張切りとのこと、ご発展を皆様とともに期待しましょう。

- ☆ 百武幹事の後任に、梅木幹事が生後3カ月の二世を抱いて、（もちろんご令室ご同伴です。）利尻町の利尻礼文国定公園管理事務所から着任しました。梅木幹事は、かつて厚真町に居住したことがあり、鶴川川口探鳥コースの開祖です。これからは北海道の鳥獣行政のため大活躍をしてもらうことになっています。
- ☆ 本道でも珍鳥発見の記録が続いています。考えかたによって、いろいろと原因が議論されましようが、観察者の数が多くなったのも大きな原因です。観察網が細かくなっていくのが楽しみです。